

## 有茎尖頭器の型式変遷とその伝播

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 駿台史学会 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗島, 義明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/6056">http://hdl.handle.net/10291/6056</a>

## 有茎尖頭器の型式変遷とその伝播

栗 島 義 明

### 一、はじめに

所謂縄文時代草創期を特徴づける石器として、有茎尖頭器<sup>(1)</sup>があげられる。槍先形尖頭器の一形態として把握されよう有茎尖頭器はその茎部存在を最たる特徴として一つの形態学的範疇を構成すると共に、茎部形状を中心に幾つかの型式変遷も予想されているところではある。また、今日有茎尖頭器は、先土器から縄文へという時代的変遷のうちにあって、両時代に共有された代表的石器形態とも把握されており、これまでにその発生と展開（型式学的変遷）に関する多くの研究が試みられてもいる（芹沢 一九七四、山崎 一九六六、鈴木 一九七二、鈴木 一九七四、白石 一九七六、加藤他 一九七八、増田 一九八一、高橋 一九八三）。有茎尖頭器が果して先土器時代から継続的に存在する石器形態であるかという疑問は拭い得ないが、それが縄文草創期研究、ひいては縄文文化起源の問題解明に寄与するであろう蓋然性は極めて高いものと評価される。おそらく草創期石器群に於ける組成レヴェルでの出現・展開・消滅という過程を除外して考えた場合、特定形態の石器として型式変遷が最も顕著に見い出されるものは、この有茎尖頭器と断言することも許されようし、通時的な観点からの型式変遷は、或いは草創期土器型式のそれと比肩し得るものかも知れない。

ところで、こうした型式変遷の頻度と関連して、該当石器の研究で特に注意すべき点が二つ程存在するように思われる。一つは有茎尖頭器が「神子柴型石斧」或いは「長者久保型石斧」に象徴されたところの片刃石斧と共に、北海

道地域にも見い出されることであり有茎尖頭器の型式学的検討の如何によっては、從來先土器時代の所産として一括されていた彼地有茎尖頭器群を本州地域でのそれと比較・検討することから、より過程的に把握することが可能となる。そこに於ては当然の帰結として、本州地域での隆起線文土器段階に対比すべき北海道地域の様相もおのずと明らかになるものかと考える。第二点として、有茎尖頭器の地域性の問題があげられよう。「立川型」（吉崎 一九六〇）・「柳又型」（小林 一九六一）或いは「小瀬が沢型」といった有茎尖頭器型式が相互に比較的独立した分布を有することが提言されて久しい（芹沢 一九七四）。しかし、このように型式的に弁別される特徴を持ちあわせた有茎尖頭器のそれぞれが、並列的に空間を異にし、しかも静的状態を保持し続けていたとは考え難い。そうした地域性が顕在化するに至る有茎尖頭器型式相互の時空にわたる動的把握は草創期文化の動態理解にも相通するものでもあらう。

従来の有茎尖頭器研究は、芹沢氏による全国的編年以後、氏が認めたところの空間及び時間内でのあり方を階梯的に研究する論考がほとんどで、他地域との関連、とりわけ北海道を含む全国的な有茎尖頭器の型式変遷の把握は階無であった。まずもってこうした研究対象の準拠枠も一層有茎尖頭器の地域性を強調し、印象付ける作用を及ぼしたことも否めない事実であらう。少なくとも今までの有茎尖頭器研究は、型式学的検討と銘打ちながらも、単にその石器形態からあたかも階梯的に理解し、相互の型式学的差異を空間に還元させていた傾向が指摘される。加えて、一定地域に限定された有茎尖頭器の研究も型式学的研究を目指しながら、最終的には他の要素——たとえば土器共伴の有無や共伴する土器型式の時間的前後関係——に拠る編年へと導びかれていたように思われる。

こうした現状を鑑みるに、その今日的研究課題として有茎尖頭器の型式学的検討の必要性が最も強く望まれるべきであらう。土器の有無や共伴土器の型式的（時間的）関係は示準としては有効であらうが、そのみによって有茎尖頭器の型式学的変遷をとらえるのは非生産的であり、それらとの比較・検討を踏えながらも主眼はあくまで有茎尖頭器自体の型式性の把握とその変遷の抽出とに置かれるべきであらう。いずれにせよ、有茎尖頭器の型式変遷を共伴土器の有無と伴出土器の型式的関係を持って代行させ、一律的に規定すること、及び有茎尖頭器の地域性と把握された型式相互の差異を、単に空間に還元してしまうという研究方向は慎まなければならない。本論の有茎尖頭器研究の

射程はまさにそこに存在するものである。

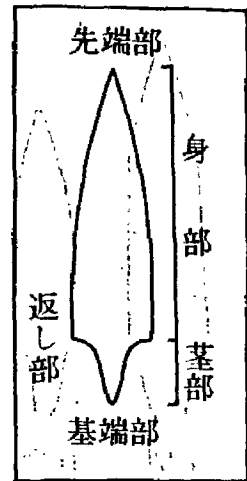
以下、本論では「柳又型」或いは「小瀬が沢型」によって代表される本州地域の有茎尖頭器の型式分類とその変遷とを抽出する以前に、北海道地域の有茎尖頭器群を検討組上に置きたい。おそらく有茎尖頭器が先土器時代からの継続的石器形態として把握され得ない限り、その系統は該期の他石器形態と同様に北方に求められるであろうし、現に北海道では土器を共存せず細石器や片刃石斧等にあたかも伴出したかたちで検出されているからである。しかし、有茎尖頭器の時間枠を「神子柴・長者久保」石器群からさらに細石刃石器群にまで下げるのは、果してどうであろうか。まずは最古型式の有茎尖頭器を確実に把握することが、その型式変遷理解の為に不可欠な条件と考える。

## 二、北海道地方の有茎尖頭器群の検討

### △立川型有茎尖頭器の型式Ⅴ

有茎尖頭器が先土器時代から縄文時代にかけて存在する重要な石器形態であることが最初に確認されたのは、一九六〇年の立川遺跡の調査によってであった。出土した立川型有茎尖頭器の特徴に関して、その命名者でもある吉崎昌一氏は、(一)精巧な押圧剝離による整形(二)柄の形態(三)柄部側辺の磨滅の三点をあげている(吉崎 一九六〇)。これに対し芹沢長介氏は、基部が長方形に近い形状を採ることをその最たる特徴と指摘する(芹沢 一九七四)。一方杉原莊介氏は白滝服部台遺跡の報文中、同遺跡出土の立川型有茎尖頭器の特徴を、押圧剝離或いは並列剝離による器体調整、木葉形や側縁が平行する身部形状、そして棒状に突出する基部形状という三つの視点より観察を行っている(杉原 一九七五)。このように立川型有茎尖頭器と認定された際の主属性に関し諸氏の見解を瞥見した時、そこに共通なる認識項を見い出すことは困難である。改めて「立川型有茎尖頭器」というものの型式学的属性とその範疇が問題とされるべきであろう。

さて、ここで立川遺跡から出土した有茎尖頭器を改めて検討することにした(なお、有茎尖頭器の各部位呼称に関しては第一図に則るかたちで以下記載してゆくこととする)。立川遺跡には第Ⅰ～Ⅳまでの遺物出土地点が存在し、有茎尖頭器はそのうちの第Ⅱ地点及び第Ⅲ地点から出土が報じられており、各地点間相互の空間的隔りと器種組



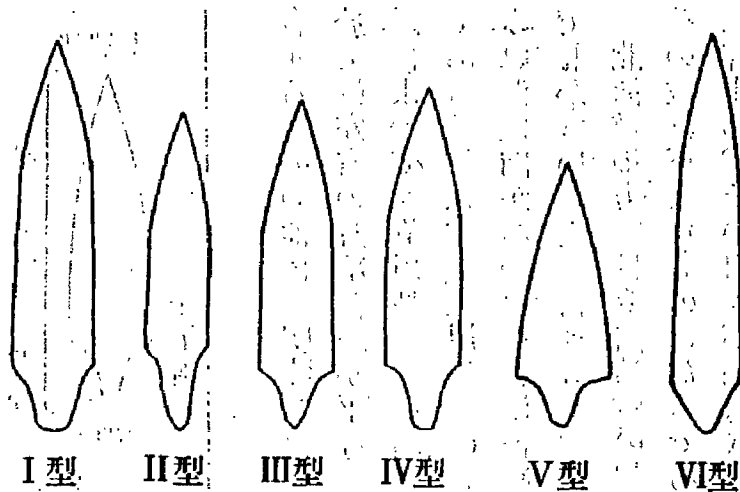
第1図 有茎尖頭器の部位呼称

有するものの他に、明瞭な返し部を持ち基部が長方形を呈するものや、棒状の基部を持つものが認められる。後者に於ては左右の身部側辺が平行線状をとるという特徴も併せて指摘されるべきであろう。このような検討を経ると吉崎氏によって「立川型」と命名された有茎尖頭器は、その身部及び基部形状を主たる弁別的要素とし三つの細部が可能である。従来、「立川型」の有茎尖頭器としてこれらのうち基部が長方形を呈するもののみ強調され、規定的に理解された傾向があったことは否めない事実であろう。立川遺跡にあってさえ、そうした有茎尖頭器はむしろ客体的存在でしかなくことを再評価すべきと考える。

北海道地方では立川遺跡の報告に前後して各地から有茎尖頭器の出土が報ぜられ、さらに採集品を加えるならば、その数は莫大なものとなるであろう。しかし惜しむべきことには発掘例に乏しく、有茎尖頭器がどのような石器形態に伴出し、その組成が如何なるものであるかという基本的問題は解明されておらず、結果的に豊富な数量を誇る有茎尖頭器群の時間的位置付けとその型式変遷に関する問題は棚上げになった状況との印象は拭い得ない。

ところで、該当地域で有茎尖頭器が比較的多く見いだされた遺跡として立川遺跡の他に、中本遺跡(加藤・桑原 一九六九)・タチカルシユナイ遺跡(吉崎 一九七三)、白滝服部台遺跡(杉原・戸沢 一九七五)、白滝服部台II遺跡(白滝村教育委員会 一九八二)、広郷角田遺跡(鶴丸 一九八二)があげられよう。また、曲川遺跡(名取・松下 一九五九)、射的山遺跡(佐藤 一九六二)、上口遺跡A(加藤・藤本 一九六九)も見落すことができない。最近では美利河I遺跡(北海道埋文センター 一九八三)や湯の里4遺跡(畑 一九八四)の調査例も看過できぬものがある。

さて、これらの遺跡から出土している有茎尖頭器を検討してゆくと、その多くが立川遺跡で細分された有茎尖頭器



第2図 北海道地方の有茎尖頭器

と型式学的類似を示しながらも、立川例と明確な差異を有する一群もまた存在する。例えば、基部が長方形形状を呈しながらもその身部形状が三角形に近くしかも小形の有茎尖頭器、所謂「遠軽ポイント」（吉崎 一九七三）と呼称されている一群がタチカルシュナイ遺跡で確認されている。また身部形状は立川例に準ずるものの比較的明瞭な返し部を有し、基部が二等辺三角形形状を呈する有茎尖頭器の一群が中本遺跡・白滝服部台遺跡、広郷遺跡及び広郷角田遺跡等比較的多くの遺跡から出土が報じられており看過できない。また希少ではあるが、基部が反しを持たず逆三角形形状の基部を有する有茎尖頭器が中本遺跡・土口遺跡A、白滝服部台遺跡などで見出し出されている。従来立川遺跡出土の「立川型」有茎尖頭器にのみによって代表され、反動的に或る意味で単一的かつ規定的に取り扱われていた感のある

北海道地方の有茎尖頭器は、このようにして瞥見した限りに於ても身部及び基部形状を中心に幾つかの細分が可能である。このような有茎尖頭器身部及び基部形状を主な弁別要素とし、本稿では、該当地域の有茎尖頭器を以下の様に六区分しておこう（第2図参照）。

I型……身部は返し部から器体上半部にかけて平行した側辺を有し、上半部に至り大きな湾曲を示し交差する。返し部の存在はあまり明瞭ではなく、幅広で寸詰りの基部は身部からゆるやかに内湾する側辺によって作出されている。基端部は平縁なものと丸みを帯びるものの双方が認められる。本例は他と比較し全体的に大形である傾向が指摘できそうである。

II型……身部形状はI型と同様であるが概して細身である。返し部分の湾曲は左右非対称形状を呈し、基部は狭長な棒状を呈す。

III型……I型と同様に中央部で側辺が平行する身部形状を呈する。基部は明瞭な返し部によって身部と区別され逆三角形の形状を呈す。

IV型……従来「立川型」と呼称されてきたもので、身部はI・III型に類する形状を持つが基部側辺は直線的で丸みを帯びた或いは平縁な基端部と交差し

長方形状を呈す。明瞭な返し部を持っている。

V型……身部側辺が湾曲した形態をとり、身部は全体的に丸みを帯びている。身部側辺が平行するI・IV型の多くが、その最大幅が身部中央部に存在するのに対し、本型のそれは返し部にある。

VI型……身部形状はI・IV型に準ずるが、身部から基端部にかけての側縁は湾曲せず直線的で逆三角形形状を呈す。本型に於ては明瞭な返し部は存在しない。

こうして、従来「立川型」と総称され単一視されがちな傾向にあった北海道地方の有茎尖頭器を身部及び基部形状を中心に六型式に細分した訳であるが、次に検討すべきはこれら有茎尖頭器型式相互の組み合わせとその時間的前後関係の追求とにある。本州地方での有茎尖頭器の型式変遷把握にあつては、伴出の土器型式が或る意味で規定的基準となり得るが、北海道地方では該当期土器群の出土は認められていない。このような状況に於ては、有茎尖頭器自体の差異性の抽出とその共伴石器（器種組成）の相違性をもつて一つの規準たらしめることが現状では最も有効な手段と言えるであろう。

#### △立川型有茎尖頭器の変遷V

まずは各遺跡を単位としてその型式的な組み合わせを検討してみよう（第一表参照）。第一表を瞥見した場合、まずもって看取されることは有茎尖頭器型式の遺跡単位での遍在性と顕在性とにある。I型からVI型まで全ての型式の見い出される遺跡は存在せず、中本遺跡・上口遺跡A・服部台遺跡のように比較的多くの有茎尖頭器型式が認められる遺跡がある一方、北村遺跡・開成遺跡・湯の里4遺跡等一・二型式の有茎尖頭器しか検出されない遺跡もある。各型式単位に見た場合、I型及びVI型は中本遺跡・上口遺跡A・服部台II遺跡以外からの出土は報じられておらず極めて偏在性を持つ型式と言えよう。一方、IV型の有茎尖頭器は美利河I遺跡・射的山遺跡・北村遺跡・開成遺跡等で出土している。これらの遺跡はI型及びVI型を組成しないことをもって共通項でくくれるようであり、両者（I型及びVI型とIV型）が時間的前後関係のうちに理解し得る可能性があることをも示唆していよう。ところで、II・III型及びV型の有茎尖頭器は両者（群）に共有されたかたちで存在しているようである。ただしII型とIII型は中本遺跡などに於てより安定したかたちで存在し、IV型を含む遺跡では相対的に減少の傾向が指摘できそうである。同様なこ

第1表 北海道地方の有茎尖頭器の組み合わせ

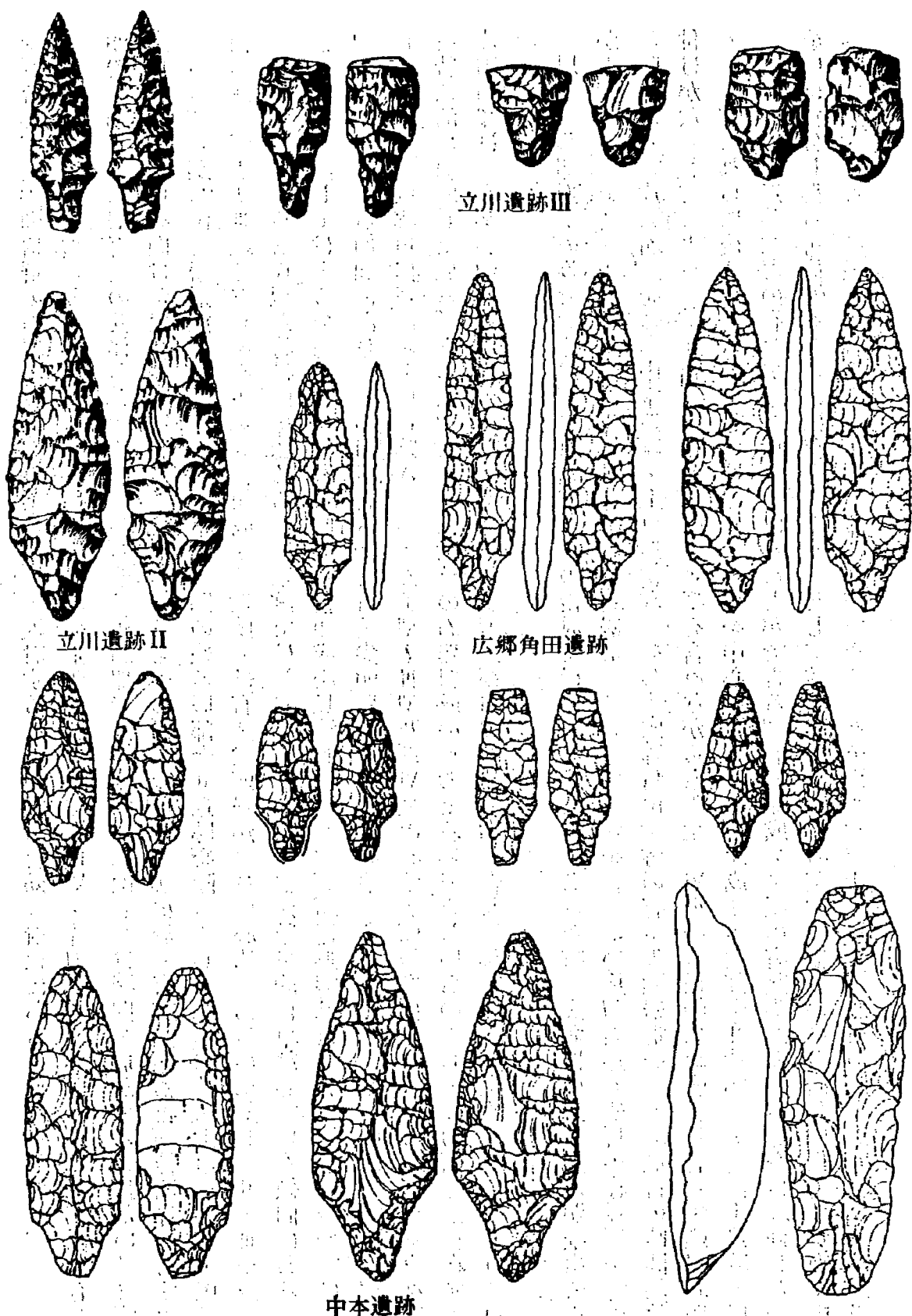
型式	I	II	III	IV	V	VI
遺跡						
中上	2	3	6		2	1
広服	1	1	1		1	1
服美	2	6	3		3	3
広射		2	5	1	2	
湯立		2	2	1		
北開		1	2	1		
		2	1	1	1	
				1	1	
		2		2		
				2		
タチカルシュナイ		2	1	5	3	

とはまたV型の有茎尖頭器のあり方についても言えようか(第3図参照)。

有茎尖頭器のこうしたあり方は、一体何を背景として起因するのであろうか。各型式の身部形状は、先に述べたようにV型を除き大きさの変化は指摘できるものの、比較的類似したものである。むしろ型式相互間の最も顕著な差異はその基部形状にこそ求めるべきものである。いま仮に基部形状のみを対象とし各型式を考えた場合、I型及びVI型が最も未発達な基部を持ち併せた有茎尖頭器と言うことができる。そしてII型とIII型を介在させIV・V型に至って基部は最も発達し、明確な返し部の存在を持って身部との区分はより明瞭となる。有茎尖頭器に於けるこうした返し部・基部形状のあり方は、相互の型式的差異と時間的關係を示している可能性がある。

基部形状より仮定されたI・VI・↓II・III↓IV・(V)という変化が果して時間的なそれとして规定的に把握し得るかは若干の疑問が残ろう。有茎尖頭器型式の変遷を、その主要属性ではあるものの基部形状のみで一系的に律しきれるとは考え難く、その為にも他の属性をもつての比較という二重の検証が必要に思われる。先述したように、現在北海道地方では該当期石器群に編年(時間)的尺度を与付する場合に最も有効な土器群の共伴が認められず、ましてや層位的關係を持った有茎尖頭器の出土も確認されておらず、こうした状況に於ては、先の三



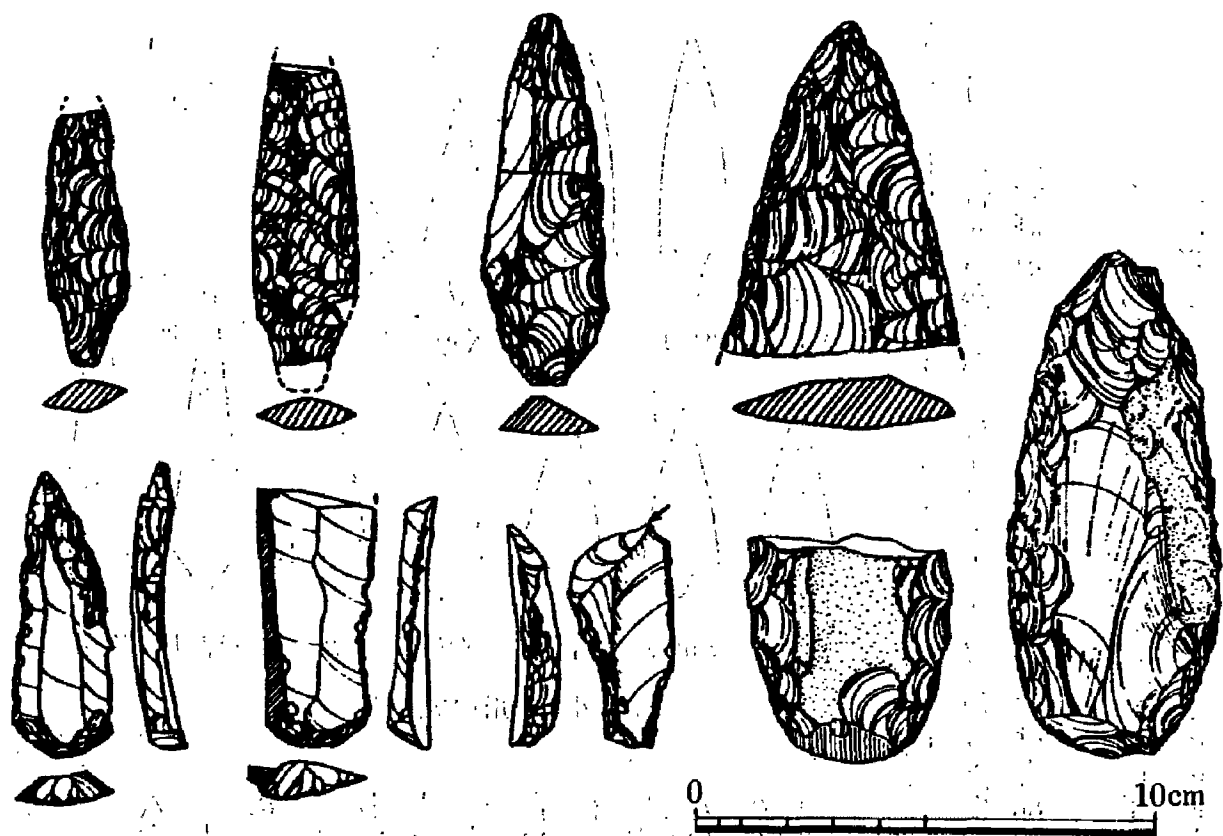


第3図 北海道地方出土の有茎尖頭器

変遷を各有茎尖頭器群の石器組成の観点より分析・検討することが最も有効な射程にあるように思われる。

さて、有茎尖頭器と共伴した石器形態としては槍先形尖頭器・彫器・搔器・片刃石斧等があげられる。他に有茎尖頭器と細石刃石器群との共伴も考えられているが、両石器形態の共時性に関しては疑問を抱かざるを得ない<sup>(3)</sup>。まず槍先形尖頭器に目を向けた場合、数量的多寡は存在するもののはとどの遺跡に於て有茎尖頭器と共伴関係を有すようである。しかし両石器形態の共伴関係に若干の疑問の残る服部台II遺跡を除き総じて中本遺跡・上口遺跡A・広郷角田遺跡などI・III型及びVI型を主体的に組成する遺跡では有茎尖頭器がより中心的であるのに対し、II・III型及びV型を組成しながらもIV型が特徴的に認められる遺跡では総じて槍先形尖頭器が数量的に卓越してゆく傾向にある。搔器・彫器に関してはどうか。各遺跡の石器組成を見渡した場合、両石器形態はとりわけ搔器に至っては普遍的に見い出される傾向にあり、その消長をもって有茎尖頭器型式の編年を論ずることはでき得ないようである<sup>(5)</sup>。しかし中本遺跡・広郷角田遺跡・上口遺跡AといったI型・III型及びVI型の有茎尖頭器を出土する遺跡ではホロカ型彫器を特徴的に組成している。さらに、これら三遺跡の石器組成のうちで看過できないものとして片刃石斧が存在する。片刃石斧は、有茎尖頭器石器群のうちにあってもI型及びVI型を特徴的に含む遺跡でのみ限定的に見い出される可能性がある。

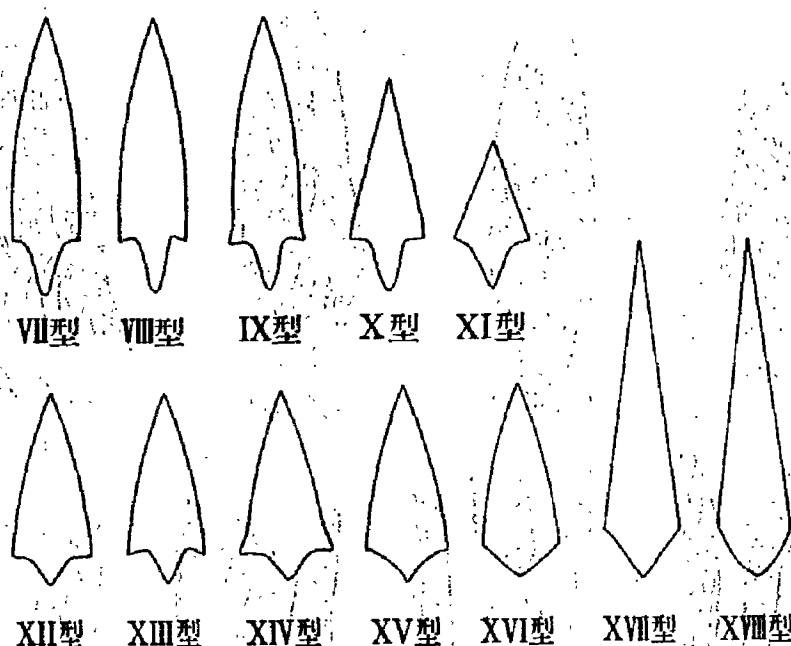
以上、茎部形状のみでなく、石器組成面からの検討を行い、大略的ではあるが有茎尖頭器の型式変遷が抽出できたかと考える。モサンル遺跡での石器組成（細石刃石器群及び有茎尖頭器を含まない片刃石斧石器群の存在）を考慮する時、自ずと片刃石斧を持つ中本遺跡・上口遺跡A・そして広郷角田遺跡の有茎尖頭器群をもって最古の時間的位置付けがなされてこよう（第4図）。それはII・III型を含みながらもI型・VI型を特徴的に組成する有茎尖頭器石器群である。これらに後続するものとしては、II・III型を中心にIV・V型を組成する服部台II遺跡・美利河I遺跡・射的山遺跡・立川遺跡などの有茎尖頭器群をあげることができる。石器組成やIII型の有茎尖頭器の有無を再評価した時、或いは細分し得る可能性もそこには存在しよう。そして該当地に於ける有茎尖頭器群の最も新しい様相はIV型を中心に組成することを最たる特徴として挙げることができる。タチカルシュナイ遺跡・北村遺跡・開成遺跡等が該当するであろう。



第4図 上口遺跡A出土の有基尖頭器石器群

従来、「立川型」と一括されていた北海道地方の有基尖頭器は、その基部形状を中心に六つの型式区分が可能であり、さらにそれらは身部・基部形状及び返し部のあり方の変化から大きく三つの階梯をもって変遷したであろうことが想定された。三階梯はまた、石器組成の検討からも裏付けられたところではある。こうした該当地に於ける有基尖頭器変遷に関しては本州地方での分析を経たうえで再検討することにした。いずれにしても北海道にあつてはV型以外、ほとんどの有基尖頭器が基部に接する身部側辺が平行線状を呈するという顕著な特徴を併せ持っていることは看過できない。加えて、各型式間相互の差異が基部形状を主属性として認識されていること、返し部の存在はさほど顕著でなく、ゆるやかな身部側辺部の内湾によって形成される基部は左右非対称の形状を呈すことも併せて注意される。

以上、北海道出土の有基尖頭器に見い出されるこのような特徴こそが、「立川型」と呼称され得べき型式的特質の単位性とその範疇をなす重要な構成要素と評価されるべきなのであろう。



第5図 本州地方の有茎尖頭器

### 三、本州地方の有茎尖頭器の検討

#### △本州地方の有茎尖頭器型式Ⅴ

本州地方の有茎尖頭器は久しく「柳又型」及び「小瀬が沢型」のそれによって代表され、また把握されてきた。しかし、それぞれの明確な内容や規定属性に関しては今だ十分な検討は加えられておらず、両型式の不明瞭さは資料増加の現状に於てより増長されている感さえ抱かせる。加えて標式遺跡である小瀬が沢洞穴遺跡では隆起線文・爪形文・押庄縄文等いずれの土器型式に「小瀬が沢型」有茎尖頭器が共伴したか明らかでなく、また柳又遺跡にあっても多数出土している「柳又型」有茎尖頭器がどのような型式の隆起線文土器と共伴関係を持つかは不明瞭と言わざるを得ない。このような状況にあつては、標識遺跡よりはむしろ他遺跡の資料との比較規準として有茎尖頭器型式の認定を行う方法がより正道であろう。

さて、本州地方で確認されている有茎尖頭器群を身部・返し部の区分に後続するかたちで付すこととする。第5図参照。

VII型……身部両側辺はゆるやかに湾曲し、返し部は身部に対し直角に近い形をとって接する。身部との境界は明瞭である。

VIII型……身部及び基部形状はVII型に類似するが、返し部は身部側辺に挟り込むような逆刺状を呈する特徴を示す。

IX型……基部の形状はほぼVII・VIII型に準ずるものの返し部が若干外側に突出したもの。為に身部下半側辺はやや内湾する。

した傾向が指摘できる。

X型……身部側辺は直線的で三角形形状を呈し、返し部は器軸に対し直角に近い形態を有す。器長に占める茎部長の長さの割合がⅦとⅨに比較して大きい。

XI……身部側辺は直線的で三角形形状の身部を構成する。返し部は身部より内湾する側辺によって形成され逆三角形形状を呈す。

XII……三角形形状を呈す身部はやや外湾した側辺を持つ。返し部は器軸に対しほぼ直角をもって交差し、茎部は逆三角形を示す。

XIII型……身部及び茎部形状はXII型にほぼ類するものの、返し部が身部に挟り込んだ形状を呈す。

XIV型……茎部形状はやはり逆三角形形状を呈す。身部も三角形形状ではあるが返し部に接した側辺は内湾し突出した返し部を持つ。

XV型……三角形形状の身部はゆるやかに外湾する側辺を持つ。返し部から基端部にかけての側辺は内湾し、両部位が連続したかたちをとる。

XVI型……身部形状はXIIとXV型に類するものの、明確な返し部は存在せず、基端部から返し部にかけての側辺は直線的である。全体形状は為に菱形に近いかたちをとる。

XVII型……直線的な側辺によって構成された身部は三角形形状を呈し、茎部側辺もまた直線的で逆三角形である。返し部は身部・茎部側辺の交点に存在する。

XVIII型……型と同様に身部は長狭な三角形形状を呈す。茎部側辺はやや外湾し、丸みを帯びた逆正三角形形状の茎部を作出している。

本州地方の有茎尖頭器をこうして十二型式に細分し得た訳であるが、各型式間の弁別的要素の最たるは北海道地方のそれと同様に身部から基部にかけて、とりわけ返し部のあり方と茎部形状とに存在する。有茎尖頭器の大きさに關しては、各型式を単位として多少の変化を伴うものの、ⅦとⅨ型そしてXⅦ・XⅧ型は総じて長身であり、対してX・XI型及びXIIとXⅧ型は全体的に短身と言ひ得るであらう。

ところで、こうした型式区分の段階に於てまず注意されることは返し部及び基部形状を中心に見た場合、ⅦⅠⅩ型とⅧⅠⅩⅦ型とが比較的類似し、それぞれが総合的に二分して把握される可能性が指摘できることである。その点で特に返し部形状が両群にそれぞれ共有されたかたちで見出される点は看過できぬものであろう。ここに於て前者を「小瀬が沢型」の、後者を「柳又型」の有茎尖頭器とそれぞれ把握することも可能かと考える。一方また、身部形状にあつては、この両者（群）が明らかに区分されながらもⅩ・ⅩⅠ型とⅩⅦ・ⅩⅧ型のそれぞれがさらに区分されるべき特徴を兼ね備えており、前者をも含めその系譜と差異的要素の時間的契機とが改めて問題とされてくる。いわばこの四型式に関しては、双方の要素を交差的に具備した感が存在するからである。いずれにせよ、こうした本州地方の有茎尖頭器をめぐる問題は該当地でのその型式変遷を検討してゆく過程で追求してゆきたいと考える。

#### △本州地方における有茎尖頭器型式の変遷△

いままでの検討のながで、日本各地から出土している有茎尖頭器は十八型式に細分された。従来、有茎尖頭器は「立川型」、「小瀬が沢型」、「柳又型」という特徴的な型式をもって三分されていたが、各々が実体的には数型式に細分し得る内容を有していることが明らかなどころではあろう。少なくとも、研究史的検討と現状の資料集成とをもつてみるならば、「小瀬が沢型」・「柳又型」それぞれの有茎尖頭器群を型式的に把握することは不可能であらうし、またそのように単一視することの弊害をこそ考慮すべきと考える。同様な提言は「立川型」に関しても該当しよう。実際これまでの検討では「立川型」とされてきた有茎尖頭器は六型式に「小瀬が沢型」・「柳又型」もそれぞれ五型式に細分し得たところであり、各々が単一型式として把握されるべきものではないことが明瞭になったことと思う。と同時に三者間には他に見い出されない共通要素が存在することも判然としたところではある。例えば北海道地方出土の有茎尖頭器群に看取された身部形状及び基部形状の独自性を思い浮べることができよう。本州地方の有茎尖頭器に關しても型式を単位としたより上位レベルでの統合性を認知することが可能である。こうした検討からは、複数の有茎尖頭器型式を含みながらも同種の形態的要素を共有する一群をもって統合的に理解することの妥当性を導き出し得ようか。<sup>(7)</sup>それは型式単位の差異性もさることながら型式群の胎動を通時、共時にわたり重視せんが為でもある。こうした意味に於ては加藤氏が提唱されたように（加藤 一九七八）、「立川系」・「柳又系」と呼称した方がより実質性







































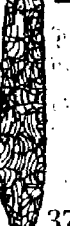
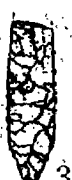


を兼ね備えたものと言えよう。<sup>(8)</sup>

#### △立川系有茎尖頭器の分布と変遷Ⅴ

北海道地方の有茎尖頭器群の検討を先に行ったが、該地に於ける最古型式は片刃石斧に組成した未発達な返し部と幅広な或いは棒状に近い基部を有する身部側辺が平行線状を呈した有茎尖頭器群（ⅠⅡⅢ、Ⅵ型）であった。従来、ⅣⅤ型も含めた「立川型」有茎尖頭器は、例えばむつ川代（芹沢 一九七四）例などの一部を除き本州地方では見出しされない型式と把握されてきた。こうした要因の最たるは、先述したように石器型式の差異を一律的に空間に還元してしまったことに求めることができ、それは逆説的に型式学的検討の欠如を物語ってゐる。こうした研究史的反省は単に有茎尖頭器にのみ該当するものではなく、草創期石器群全般に当てはまる事項でもあろう。

ところで、本州地方にあっても土器を共伴しない有茎尖頭器が存在することは既知の事実ではある。中林遺跡（芹沢 一九六六）・鳴鹿遺跡・前田耕地遺跡等がその代表的遺跡としてあげられている。これらの遺跡出土の有茎尖頭器群は、その大半が明瞭な返し部を持ち併せない逆三角形の基部を持つⅥ型或いはⅢ型の有茎尖頭器より構成されていることが知られ、身部と基部との接点は左右の側辺で相違しており、結果的に基部は左右非対称形状を呈すものが圧倒的である。加えて土器を共伴しないこれら三遺跡に代表された有茎尖頭器群が長身で身部両側辺、とりわけその下半部位が平行線状を呈すという共通要素を兼ね備えたものであることも見過すことができない。言うまでもなくここに認められた諸特徴は、本州地方の有茎尖頭器群が少なくとも北海道地方のそれと相互に有機的関係を有していたことを示唆するものと評価できるであろう。ただし、北海道地方ではⅠⅡⅢ型のなかにⅥ型の有茎尖頭器がむしろ客体的に存在したに過ぎないのに対し、本州地方に於けるそれはむしろⅥ型こそが幾つかの多様性を持ちながら主体的に見出し出される傾向がある。現在のところ、こうした相違が時間的な或いは空間的な差異として理解されるのかは断じ難く、今後追研すべき問題点と言えるかも知れない。

さて、本州地方に於ける立川系有茎尖頭器の出土は上述した三遺跡にのみ限定されたものではない。例えば山形県沼ノ平遺跡（阿部 一九七六）や同鳥谷沢遺跡（加藤 一九六五）からは棒状の基部を持ち併せたⅡ型の有茎尖頭器の出土が報じられているし、栃木県星野遺跡（芹沢 一九六九）・長野県杉久保遺跡（大沢 一九六二）等ではⅢ型

	本 州 地 方	北 海 道 地 方
I 型	 1	 2  3  4
II 型	 5  6  7  8	 9  10  11  12
III 型	 12  13  14  15	 16  17  18  19
IV 型	 20  21  22	 23  24  25  26
V 型	 27  28  29  31	 30  31  32  33
VI 型	 34  35  36  37	 38  39  40

第6 図北海道及び本州地方出土の立川系有茎尖頭器

むつ川代(1), 白滝服部台(3・4・11・38~40), 前田耕地(5~7), 沼ノ平(8), 立川Ⅲ(9・25), 中本(10・11・33), 中林(12・13・34・35), 杉久保(14), 屋敷田(15), 曲川(16), 広郷角田(17~19), 黒川東(20), 九合(21), 狐久保(22), 北村(23, 24), 射的山(25, 30), 多摩N.T.426(27, 28), 座散乱木(29), タチカルシュナイ(31), 弓張平(36, 37)

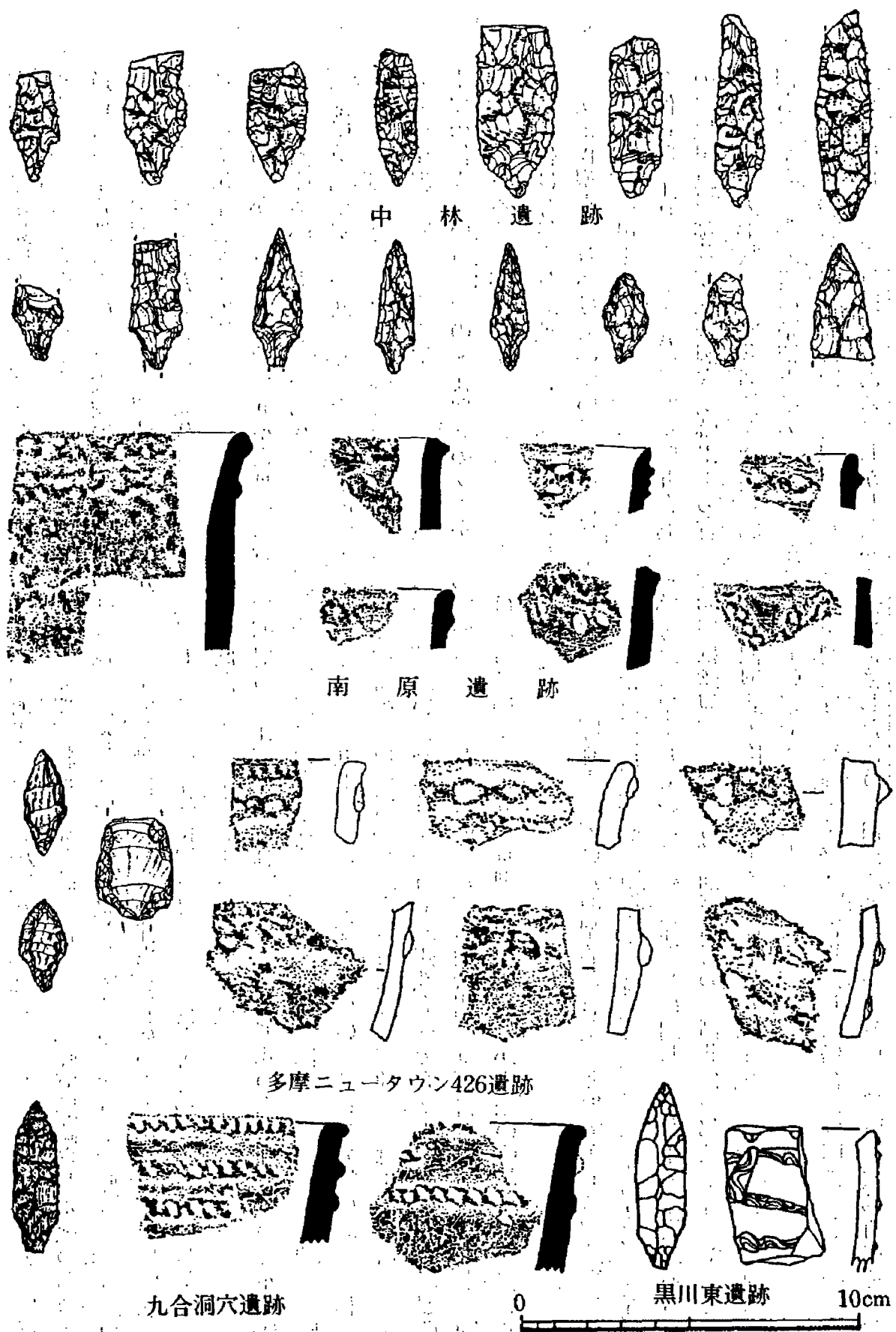


有茎尖頭器が見い出される。また、山形県弓張平遺跡（加藤 一九七八）ではⅥ型にはば限定された有茎尖頭器群の出土を認めることができ、少なくともこうした有茎尖頭器資料群を見た時、従来或る意味で黙認された感のある北海道地方と本州地方との有茎尖頭器群相互の断絶性は見い出し得ないように思われてくる（第6図参照）。特にこれら立川系有茎尖頭器が主体的に認められる遺跡が、これまで草創期土器型式の伴出を見ないことから「先土器時代」との扱いを受けていたことは、時代呼称の問題を除外してその編年的位置付けを考える場合看過できぬものがある。そこに立川系有茎尖頭器の本州地方への伝播の姿と時間が見い出されようからである。

中林遺跡からはⅥ型の他にⅡ型とⅢ型の有茎尖頭器の存在が認められている。第Ⅲ型式の本州地方での分布は他に千葉県南原遺跡（大塚他 一九八〇）、神奈川県花見山遺跡（坂本・鈴木 一九七九）、同岩瀬谷戸遺跡（神奈川県民部県史編集室 一九七九）や新潟県屋敷田遺跡（中村 一九七八）などで知られている。ここで特に注意されることは他遺跡を含め、中林遺跡と南原遺跡との有茎尖頭器の酷似資料から示されるように、前者では土器を出土せず後者では土器（隆起線文土器）と共伴する点にある。或いは両遺跡が一方で本州地方への有茎尖頭器の波及、展開と土器の伝播という二つの文化要素の交差を示しているのかもしれない。ただし両者間には石器群の検討からも時間幅と考えられる差異が存在することもまた事実ではある。いずれにせよⅢ型の有茎尖頭器が古相の隆起線文土器を共伴する事例は今後より追求されるべき問題であろう。<sup>(9)</sup>

次にⅣ型をとりあげてみたい。Ⅳ型は従来「立川型」と呼称されていた曲型的な有茎尖頭器でもある。該当型式の本州地方での出土はⅤ型と共に希少ではあるが、神奈川県黒川東遺跡（黒川東遺跡調査団編 一九七九）、長野県狐久保遺跡（小林 一九六八）、岐阜県九合洞穴遺跡等から出土している。狐久保遺跡に関しては若干の差異があるものの、黒川東遺跡及び九合洞穴遺跡出土の有茎尖頭器は酷似資料である。前者も含め三例共に身部は平行した側辺を持ち基部は長方形形状を呈す共通性が認められ、さらに同型式の隆起線文土器を伴出している点も注意される。<sup>(10)</sup>やはり本例もまた有茎尖頭器の系統とその変遷を考えるうえで軽視できぬものと言えよう。

次にⅤ型の有茎尖頭器に関してであるが、Ⅴ型を例えば「遠軽ポイント」と規定した場合には同様なものを本州地方に見い出すことは困難である。しかしながら先に指摘したように白滝服部台Ⅱ遺跡や広郷遺跡・広郷角田遺跡など



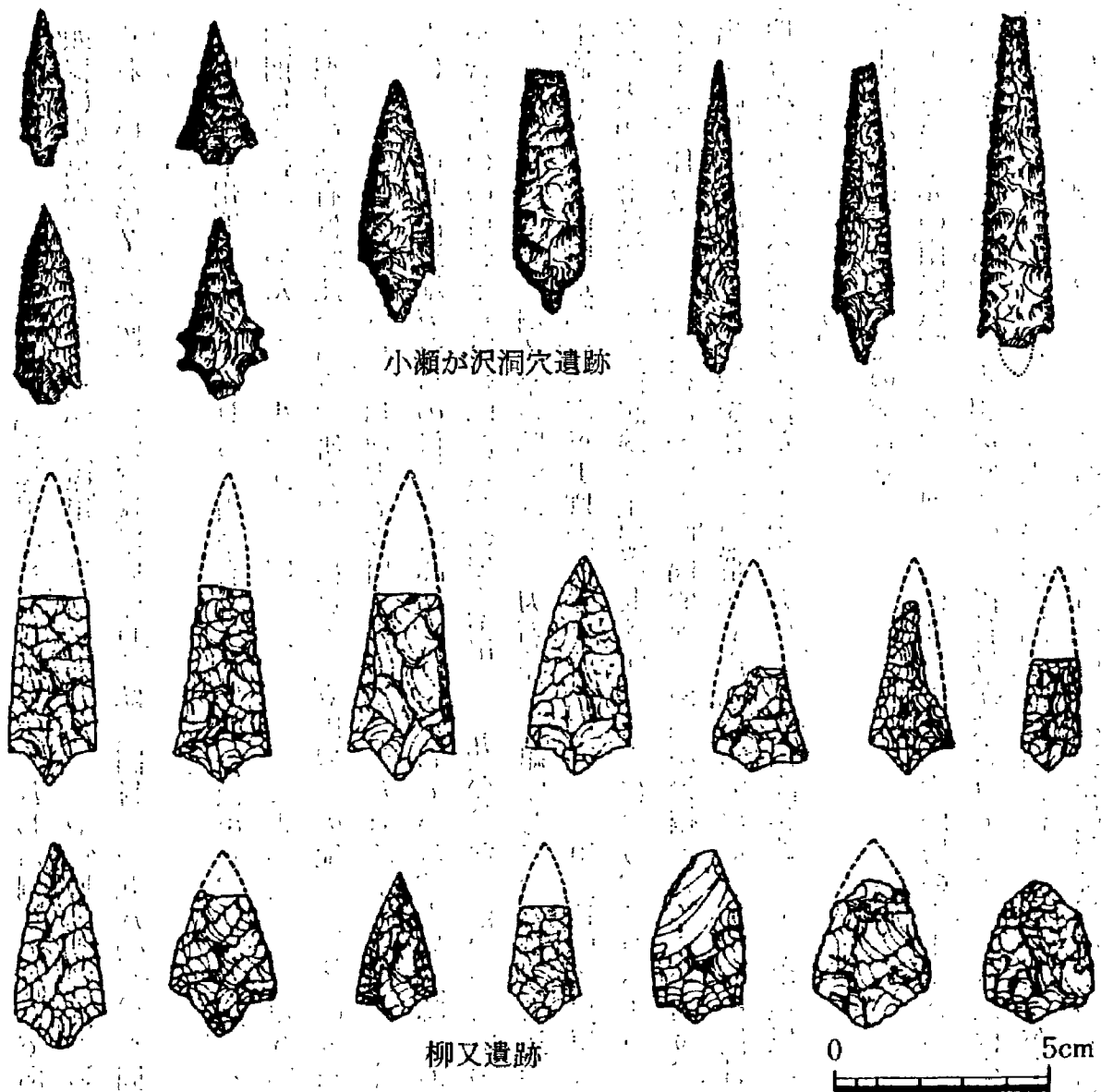
第7図 関東および中部地方出土の有茎尖頭器及び伴出土器

的で身部が三角形形状を呈す「遠軽ポイント」こそが、むしろ例外的存在であることを知る。このようなV型の有茎尖頭器は東京都多摩NT426遺跡(原川・鈴木 一九八一)や宮城県座散乱木遺跡(石器文化談話会 一九八一)に認められている(第7図参照)。また宮城県鹿原D遺跡(岡村 一九八〇)にも同型式と考えられる有茎尖頭器の出土が報じられている。

以上、本州地方に認められる立川系有茎尖頭器群を摘出し、検討を加えることによって北海道のそれと相互に有機的關係を持っていたことが少なからず明らかになったことかと思う。第6図を参照した場合にも、両地域の有茎尖頭器型式の共有は瞭然であり、研究史上に見る「立川型」の地域性とその分布範囲という問題は再考されるべきかと考える。と同時に、これら本州地方で立川系と認定された有茎尖頭器群の多くが土器を共伴せずに見い出されていることは、その北海道地方からの伝播の時間的枠を設定している。中林遺跡・前田耕地遺跡・沼ノ平遺跡及び若干の問題を含むものの弓張平遺跡や鳴鹿遺跡(沼・増田 一九六八)などは、そこでの最古の時間的位置付けがされてこよう。特に前田耕地遺跡と沼ノ平遺跡では「片刃石斧」を組成しており、北海道の上口遺跡Aや中本遺跡などとの共通性が指摘できる。南原遺跡・多摩NT426遺跡・座散乱木遺跡・田沢遺跡や黒川東遺跡・狐久保遺跡・九合洞穴遺跡などの有茎尖頭器群は明らかに隆起線文土器を共伴することにより、それらよりも時間的に後出するものである。もちろん土器を伴う有茎尖頭器にあっても時間的前後関係を指摘できそうであり、先の中林遺跡と南原遺跡とでのⅢ型の伴出を評価すればⅣ型とⅤ型を持つ石器群が立川系の内では最新段階の位置付けがされてくる。いずれにせよ、北海道地方からの有茎尖頭器の伝播が、本州地方にあっては隆起線文土器出現以前からその比較的古い段階にわたっていたことは明らかであろう。

#### △小瀬が沢系有茎尖頭器の変遷Ⅴ

ところで先の南原遺跡では、Ⅲ型の他にⅦ型の有茎尖頭器の出土が認められている。両型式の共存関係を疑問視しない限りこれをもって最古相の時間的位置付けがなされてこよう。例えば南原遺跡例は同じⅦ型であっても花見山遺跡や小瀬が沢洞穴(中村 一九六〇)例と比較した場合に幾つかの差異が指摘できそうである(第8図参照)。まず第一に身部両側縁はゆるやかな湾曲を示すもののそれは先端部付近に至ってより顕著となり、身部中央部から返し部位



第8図 中部地方出土の有茎尖頭器

にかけてはやや平行的でもある。また返し部はそれ程に明瞭なものではなく、若干の丸みを帯びると共に左右非対称形状を呈し、基部は返し部から直線的に基端部へと連続するものではなくむしろゆるやかな湾曲を帯びており、基端部は丸みを帯びている。このように南原遺跡出土のⅦ型の有茎尖頭器に観察される諸特徴は一部Ⅱ型やⅢ型に相通じた内容を具備しており、これをもってⅡ型・Ⅲ型の立川系からⅦ型の小瀬が沢系への継続性及び変化ととらえておきたい。南原遺跡の有茎尖頭器を見る限り、その変化が時間差をあまり持たない比較的小スムーズなものであったことが理解されるようである。

千葉県瀬戸遠蓮遺跡（鈴木一七九七）、同林跡遺跡（田村・

金子 一九八二）、神奈川県柏ガ谷長ヲサ遺跡（中村 一九八三）、東京都なすな原遺跡（岡島 一九七七）出土のⅦ型有茎尖頭器には、先の南原遺跡ほどではないにせよ、そこに見い出された諸特徴が継続して認められる。おそらく南原遺跡との間に若干の時間的前後関係を考慮すべきであろう。<sup>(11)</sup>

こうした後に花見山遺跡・小瀬が沢洞穴遺跡によって特徴付けられるⅦ型の有茎尖頭器が位置づけられてくる。身部は直線的傾向を一層増してより真正な三角形を呈すと同時に、明確な返し部を持ちそれは器軸（長軸）に直交したかたちをとるようになる。加えて両遺跡出土の有茎尖頭器を見る限り、狭身化すると共に大小バリエティの存在が指摘できそうである。同じ南関東に存在する南原遺跡と花見山遺跡とのⅦ型有茎尖頭器を比較した場合、上記したような型式的变化がより説得性をもって把握されてくる。さらにそこへ瀬戸遠蓮遺跡、なすな原遺跡出土の有茎尖頭器群を介在させた場合には、こうした変化をより過程的に抽出し得るであろう。埼玉県前原遺跡（村松 一九八三）も花見山遺跡と共により後出的な様相を示している。

Ⅶ型・Ⅸ型の有茎尖頭器に関してはどうか。両型式は小瀬が沢洞穴遺跡・花見山遺跡の双方に既に見い出すことができ、とりわけⅦ型は小瀬が沢洞穴遺跡に顕著な存在である。他にも埼玉県橋立岩陰遺跡（芹沢ほか 一九六七）、神奈川県代官山遺跡（上田・砂田 一九八四）からⅨ型が、そして埼玉県小岩井渡場遺跡（安岡 一九七七）、南通遺跡（高橋 一九八三）からはⅦ型のそれぞれ有茎尖頭器の出土が認められる。ところでこれらの資料を見る限り、全体的にⅦ型と比較して基部形状の変化は少ないものの身部形状に於ては小形化の傾向が指摘でき、それは器軸に対する身部両側辺の角度がより大きくなっていることと呼応関係にありそうでもある。現象的には身部はより三角形形状を呈す度合を増しており、橋立遺跡や八ヶ上B遺跡などを念頭に置けば、Ⅶ型よりⅩ型への類似が一層強い印象を与える。さらにここに於て注意されるのはⅦ型を中心にしたⅦ・Ⅸ型という返し部及びそれに関連したところの身部形状の変化がⅩ型のうちにも同様に見い出される点にある。

以上、これらの有茎尖頭器群のあり方を評価する時、自ずと次の予察が導き出されてこよう。すなわちⅦ型からⅩ型へ除々に有茎尖頭器が小型化してゆくのではないだろうか、そうしたなかでⅦ型を中心に認められた返し部形状はⅩ型に至って引き続き継続するということである。そうした型式変遷の過程を含め基部形状の変化がほとんど見い出

されない点は留意しておく必要がある。

おそらくⅦ型とその型式変遷をもって中心的に理解される小瀬が沢系有茎尖頭器は、南原遺跡と花見山遺跡の一部を最古とし、林跡遺跡・瀬戸遠蓮遺跡・柏ガ谷長ヲサ遺跡或いはなすな原遺跡を介在させ前原遺跡そして八ヶ上B遺跡・橋立遺跡・小岩井渡場遺跡と時間的に変化していった可能性が強い。Ⅷ型が他型式に増して安定した出現頻度を見せるのは現在のところ小瀬が沢洞穴遺跡だけであり、丸みを帯びた返し部と突出した茎部を持ち併せた特異な有茎尖頭器型式をも含め非常に限定的な空間で、しかも短期間に発達した可能性がある。それは花見山遺跡・前原遺跡に若干先行し、なすな原や上野遺跡に並行した時間的位置づけが許されるものと考えている。そこに於けるⅧ型を主体とした中部地方北部の小瀬が沢系有茎尖頭器がどの様な変遷過程を辿ったかは現在の資料をもって語り得ないが、少なくともそこに関東地方に見るような小形化の傾向を指摘することは困難な状況にある。今後の資料が待たれる由縁である。

Ⅶ型からⅩ型へという小形化の過程にあって、本地域の有茎尖頭器を語る上で看過できぬ問題がある。一つはⅦ型からⅩ型へという時間的推移に伴う有茎尖頭器自体の小形化である。既に一九六六年に芹沢氏はこうした現象を指摘されてはいたが、芹沢氏の論拠の一つには有茎尖頭器の鏃への転化を前提としたものであり、小形化の意味自体相違する。Ⅶ型からⅩ型への変化に見い出される小形化現象は有茎尖頭器身部においてであり、茎部形状とその大きさに関して小形化という変化及び過程を見い出すことは困難である。それは先に示された中林↓南原↓柏ガ谷長ヲサ・なすな原↓花見山・前原↓橋立・八ヶ上Bという有茎尖頭器群変遷の相互を比較した場合明らかとなる。橋立・八ヶ上B遺跡など最終末の有茎尖頭器を見ると、身部の小形化に対し茎部が大形化するという指摘さえ受け入れられそうである。しかし、ここに見られた有茎尖頭器の小形化現象は鏃への転化へ至らなかったとは、八ヶ上B遺跡をはじめとし各遺跡での両石器形態の共伴が示すところである。荷取洞穴遺跡（小林 一九六三）や壬遺跡（国学院大学文学部考古学研究室 一九八二）での石鏃のあり方及びその石器組成内での位置からは、両石器形態がむしろ相互に對立的な関係にあったことすら示唆している。<sup>12</sup>

#### Ⅷ柳又系有茎尖頭器の変遷Ⅴ

柳又遺跡から出土した有茎尖頭器は、一九六九年既に小林達雄氏によって一つの方法論確立の準拠資料として分析

されてはいるが（小林 一九六九）、本稿では先の有茎尖頭器型式の区分に則るかたちで標式遺跡である柳又遺跡の有茎尖頭器群の特徴をまずは総体的に評じておきたい（第8図参照）。

柳又遺跡出土の有茎尖頭器群はⅫⅠ・ⅫⅡ型の五型式から構成されている。各型式は等量に全体のなかに位置する訳ではなくそこに数量的多寡を認めることができる。すなわち返し部から基端部にかけての茎部側辺が大きく内湾したⅫⅤ型の有茎尖頭器が最も安定した姿で見い出され、器軸に対し返し部が直角で逆三角形の茎部を持つⅫⅡ型がそれに続く。ⅫⅢ型・ⅫⅣ型・そしてⅫⅥ型に関して言えば前二者に比して数量的に少なく客体的存在でしかないものの、あくまで柳又遺跡の有茎尖頭器群の一員として数えられるべき位置が与えられる。こうした型式の組み合わせの特徴に加えて、本遺跡の有茎尖頭器で注意すべきは身部形状を中心に観察した場合、型式の区分を越えたかたちで大形のもの和小形のものという二区分が可能なることにあり、さらに身部側辺形態も直線的な一群と非直線的な一群とに分かれるようである。このような型式的組み合わせとその特徴が見い出される柳又遺跡の有茎尖頭器群の時間的位置付けの可能性について、少なくとも返し部形状に幾つかの変化が観察されること、立川系の要素をほとんど見い出し得ないことなどから最終末ではないにせよ比較的新しい段階へ位置付けられる蓋然性が強い。それは共伴した土器型式が「細隆起線文」と記載されている事実とも矛盾するところが少ないように考えられる。或いは有茎尖頭器型式の相互にある程度の時間差を考慮すべきであろうか。

次に柳又遺跡との比較でしばしば引用される上黒岩岩陰遺跡の資料を検討し、その類似性なり差異性を抽出してみたい。ここでは九層出土の石器を対象とするが、今もって正式報告がない為に報告分（鈴木 一九八一）にのみ限定して検討する。

まず上黒岩からは柳又遺跡で比較的顕著に認められたⅫⅡ型の有茎尖頭器の出土が稀少であり、それらも柳又例の如く直線的な身部側辺を有さず湾曲するという相違点が識別される。同様なあり方はⅫⅣ型についても該当し、ⅫⅡ型に關しては少なくとも上黒岩遺跡に類例を求めることは困難な状況にある。一方ⅫⅤ型の有茎尖頭器は本遺跡でも数量的に卓越する型式で、身部長やその側辺形態も含めて柳又例と強い類似性を示す。こうしてみると上黒岩の有茎尖頭器も型式的なあり方（組み合わせ）とその数量的偏在性に於て柳又遺跡とほぼ重複した内容を有することが理解されてこよ

う。やはりXV型が最も卓越し他の型式は客体的存在の傾向を示す。ただしⅫ型はそこに見い出されず、またⅪ型に限定しても形状の点で両遺跡間には差異的要素が認められ、さらにXV型についても上黒岩例より幅広で基部の発達に弱い印象を与えている。柳又遺跡のXV型の一群に返し部や基部形状では違わぬもののその長幅比に於て突出した一群が組成していることは留意されるべきであろう。では、相似した要素の共有を示しながらも、ここに抽出された相違はいつたい何を要因に現象したものであろうか。

ここで柳又系有茎尖頭器の分布地域で土器伴出の認められていない愛知県萩平遺跡（安達 一九六九）と柳又・上黒岩遺跡より後出的なことが明らかな高知県不動が岩屋洞穴遺跡（岡本・片岡 一九六九）・愛知県酒吞ジュリンナ遺跡（大参 一九七〇）の有茎尖頭器をとりあげ比較検討し一連の差異的要素を抽出してみたい。萩平遺跡出土の有茎尖頭器群は先にとりあげた中林遺跡のものに類似するものとされ、土器出現以前の編年的位置が与えられている。こうした時間的位置付けは基部が逆二等辺三角形形状を呈し、身部両側辺が平行したⅢ型類似の有茎尖頭器の存在からも肯首されるものかも知れない。しかし同時にⅦ型及びⅪ型と認定される有茎尖頭器の存在は中林併行という時間的位置付けに若干の疑問を抱かせるところでもある。いずれにせよそれが古相の有茎尖頭器群の姿を示していることとは否定し難く、この段階に既にⅦ型とⅪ型が見い出されることは或いは小林氏の説かれたように「小瀬が沢型」と「柳又型」それぞれの有茎尖頭器群の分岐点に位置付けられる可能性もある（小林 一九六七）。Ⅲ型類似の有茎尖頭器の存在は、その一つの論拠ともなり得ようか。萩平遺跡の有茎尖頭器群の評価にあつていま一つ看過できない点は、Ⅶ型を中心とする比較的大形の一群とⅪ型など小形の一群とが共存していることで、ここに柳又遺跡との共通性を導き出せそうでもある。確かに柳又遺跡には萩平例に相通じる身部形状を持ったⅦ型が存在している。両者間には長幅比と茎部長とに若干の差異を生じているが、現状では一応時間的推移に伴う型式的変化と理解しておきたい。すなわち萩平から柳又への有茎尖頭器の変化現象として長幅比の近似性と茎部（長）の小形化とを指摘しておきたいのである。両遺跡の有茎尖頭器群間の比較から抽出されたこのような変化は、また柳又遺跡と上黒岩遺跡との比較からも導き出せそうである。実際、上黒岩の有茎尖頭器は他に比べ著しく幅広でその基部はわずかに痕跡を留めているに過ぎぬものもある。さらにこうした傾向は上黒岩に近接する不動が岩屋洞穴に至つて頂点に達している感を抱かせる。



以上を総括してみるならば柳又系有茎尖頭器の一連の変遷、すなわち萩平→柳又→上黒岩→不動が岩屋が導き出されてこよう。それは身部の幅広傾向（換言するならば幅自体の変化が少なく身部長が短くなる傾向）と茎部の小形化とをもって典型とするものである。<sup>13)</sup>

ところで不動が岩屋洞穴遺跡からはXV型の他に比較的細身の身部を持ち茎部が逆三角形形状を呈すXVII型の有茎尖頭器が存在する。酒吞ジュリナ遺跡からも多数のXV型に共伴したかたちでXVII型が見受けられる。先述した柳又遺跡や上黒岩遺跡に同型式を認めることができないことは、XVII型の有茎尖頭器が不動が岩屋及び酒吞ジュリナの段階に出現したことを意味していよう。それは伴出した土器型式から隆起線文・爪形文という限定された時間的帰属が与えられてくる。岐阜県萩の湖遺跡（紅村 一九七四）からのXVII型出土は、こうした編年の位置付けをより補強するものである。近畿地方からは柳又遺跡等に陵駕するXV型をはじめⅫ・XIV型そしてXVII型等多くの有茎尖頭器が単独に近いかたちで採集されている（増田 一九八一）。これまでの柳又系有茎尖頭器群の検討をもってみるならば、全てではないにせよそのほとんどが土器（おそらく隆起線文土器）を伴出すべき性格と帰属年代とが与えられてしかるべきである。三重県石神遺跡（早川・奥 一九六五）等も例外ではあるまい。

XVII型の有茎尖頭器は広島県馬渡遺跡（帝釈峡遺跡調査団 一九六四）からも発見されており、さらにそこには丸みを持ち返し部存在の不明瞭なXVIII型を共伴している。一方石器組成に目を向けるとこれらと共に石鏃が発見されており、酒吞ジュリナ・萩の湖そして不動が岩屋などと共通している。しかし馬渡遺跡の場合には伴出土器が無文の平底土器であり、時間的には若干後出のものかも知れない。XV型の有茎尖頭器が組成していない事実からも同様な見解が導き出されてこよう。

XVII型とXVIII型の有茎尖頭器の分布は、その後さらに西方の九州地方にも認められる。前者が長崎県泉福寺洞穴遺跡（麻生 一九七七）、同岩下洞穴（麻生 一九六八）から、一方後者は佐賀県川内村（麻生 一九七七）、同田尾遺跡（肥前町教委 一九八二）からそれぞれ検出されており、泉福寺では「押し引き文土器」に伴出することから馬渡よりもさらにこれらの有茎尖頭器が後出的である可能性を暗示している。

柳又系有茎尖頭器は萩平→柳又→上黒岩という型式変遷の過程でその分布を中部地方から近畿・四国地方へと広

第2表 有茎尖頭器の編年

	北海道	東北	関東	中部	中国	九州
I期	上口 A 中 本	むつ川代 沼ノ平	前田耕地	中林・鳴鹿		
II期	服部台 II 立 川	座散乱木	南 原 TN426. 黒 川東	田 沢 九合・狐久 保		
III期	(美利河 I)	大 原 B 津 谷	瀬戸遠運・ なすな原 花見山・前 原	柳 又 小瀬ガ沢 王	上 黒 岩 (上 黒 岩)	
IV期		日 向 一 ノ 沢	橋立・小岩 井渡場 八ヶ上 B・ 南通	立 石 梶の湖・ 仲町	不動ガ岩屋 石 神	
V期					馬 渡 泉 福 寺 岩 下	

げ、その後同地域内で型式変化を遂げるもののXVII型・XVIII型型に至っては西方の瀬戸内、さらに九州地方へと分布を拡大している。柳又系有茎尖頭器群の動態と評価できるであろう。その九州地方への両型式の伝播は、泉福寺洞穴の調査事例からは細石刃石器群消滅の直後であったものと考えられる。またこうした有茎尖頭器の西方への伝播は或る程度の時間幅を持った段階的なものであったのであろう。それは共伴する土器型式の差異が示すところであり、同時に中部以東では明確な時間差を持つ有茎尖頭器と石鏃がこれらの遺跡では共存関係にあることから(14)も明らかなるところではある。

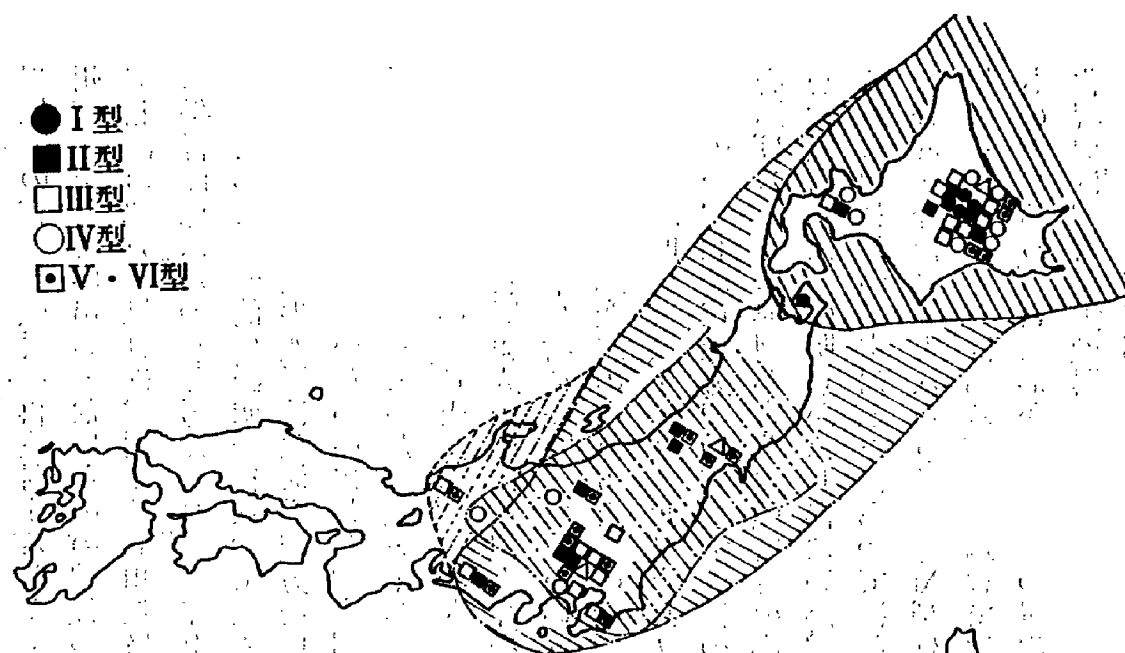
#### 四、ま と め

本論文で指向したのは、従来土器型式によって規定されてきた感のある有茎尖頭の変遷を、型式学的検討の俎上に置くことにあった。同時に過程的に抽出し得た型式変遷を基にその動態を抽出することも併せて考慮した(第2表参照)。そこに於ては、とりわけ立川系と柳又系の有茎尖頭器の動態が明瞭に把握されたものかと考えている。前者は従来北海道地方にのみ限定的に存在すると考えられてきたが、本

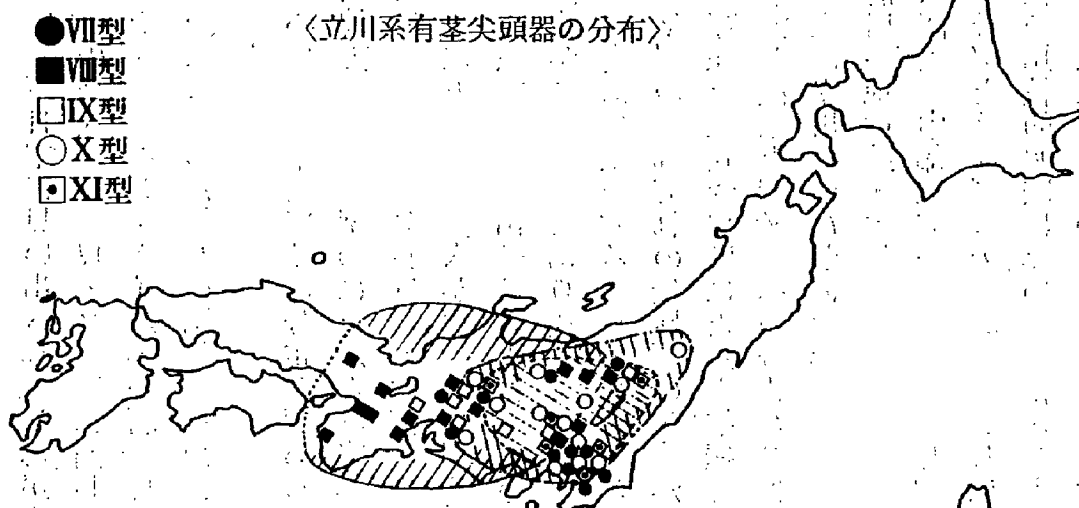
州地方の有茎尖頭器を再検討するなかで広く東日本に見い出されることが明らかとなったことと思う。その多くは本州でも土器を伴出してないものの、幾つかの型式(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ型)に関しては古相の隆起線文土器と共存する。翻って北海道地方を見れば、例えば立川遺跡やタチカルシュナイ遺跡の石器群は本州地方の古相の隆起線文土器と時間的に併行関係にあったと考えられる。<sup>15)</sup>第9図はこうした相互の関係とその伝播を図示したものである。以下、第9図を参考として概略的に説明を行なってまとめたい。

立川系の有茎尖頭器は北海道地方を中心に東日本までその分布が認められる。ⅠⅡⅤ型は北海道地方にあっては全土器を伴出してないのに対し、本州地方のⅢⅣⅤ型のほとんどは隆起線文土器を伴い同型式の伝播時には既に土器の使用が一般化していた事実を示している。Ⅰ型の分布はほぼ北海道にのみ限定されるもののⅡ型・Ⅳ型は広く東日本に分布していることから、その北海道地方からの流入が比較的短期間に行なわれた可能性を読みとることができ。両地域の石器組成の内に片刃石斧を特徴的に見い出せることは、こうした考えを傍証しているようにし、また有茎尖頭器と「神子柴長者久保」石器群との同化がスムーズであり決して対峙するものでなかったことをも示唆している。両石器群の型式変遷のあり方とその伝播の姿は相重複するようである。おそらく有茎尖頭器の本州地方への伝播は大きく二度ほど(Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ型とⅣⅤ型のそれぞれの伝播)の契機が存在したのである。

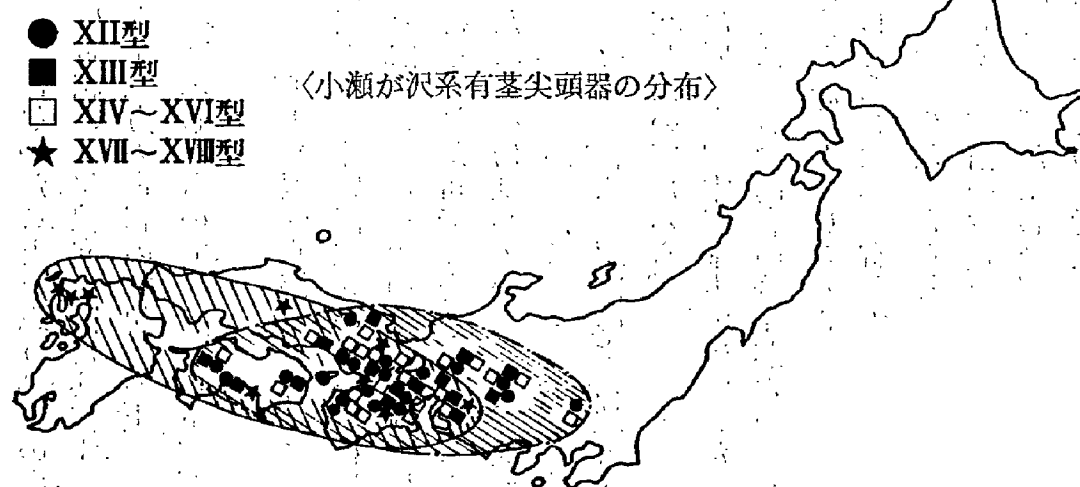
この後、北海道地方での有茎尖頭器の存在と型式変化はほとんど把握されない一方、本州地方では顕著な型式変化を遂げる。その典型が有茎尖頭器群の小瀬が沢系と柳又系への分化及び群化とにある。両者の分化がどのような背景を契機としたかは明らかにし得ないが、既に立川系のなかに大形と小形の双方が組成していることが解明の糸口となるかも知れない。本州地方にあっては前田耕地遺跡・中林遺跡・萩平遺跡そして鳴鹿遺跡の有茎尖頭器群のより詳細な分析が今後必要となる。ⅦⅧⅨ型は関東・中部地方を中心に分布し、そこでは少なくとも数段階の型式変化が予想されるところではある。その過程では身部と茎部側辺の直線化(これは器面調整技術の改良と向上とを要因とするものである)と大形から小形への過程を比較的明瞭に見い出し得ることができた。ただし身部長を中心とした小形化現象は、有茎尖頭器自体の銚への転化を意味するものではなく、他を要因とするものと考えるべきであろう。小形化という現象が茎部には該当しないことは、それ自体着柄を媒介としたところの有茎尖頭器の機能に及んでいないこ



〈立川系有茎尖頭器の分布〉

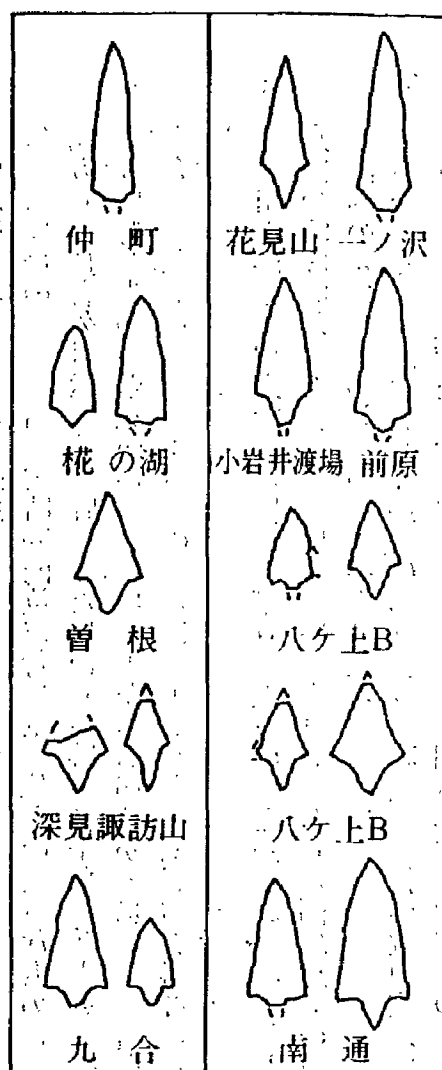


〈小瀬が沢系有茎尖頭器の分布〉



〈柳又系有茎尖頭器の分布〉

第9図 有茎尖頭器型式の分布と動態



第10図 微隆起線文(右)および爪形文(左)に伴う有茎尖頭器

小瀬が沢系と分化したものと考えられる。ただし初期段階での両者の差異は明瞭なものではなく、それは時間的継起の過程でより増長されていたのであろう。萩平と柳又の有茎尖頭器を比較すると茎部と身部の小形化という変化の過程を窺い知ることができる。そうした現象が隆起線文土器の終末期に至って頂点に達することが不動ガ岩屋遺跡・配呑ジュリナ遺跡の資料から知ることができた。

こうした柳又系の有茎尖頭器の最終段階に出現するのがXVII型・XVIII型である。両型式はいった四国地方まで留まっていた柳又系の分布を越え、瀬戸内地方さらに九州地方まで及んでいる。そうした柳又系の西方への波及は馬渡遺跡・泉福寺洞穴遺跡に於ける石器組成と伴出土器を見る限り、立川系の本州への波及よりもさらに時間的な傾斜持つものであったことを示している。

本稿をまとめるにあたり戸沢充則先生には多大な御教示を得ることができた。先生の学恩に対し深く感謝致します。また大塚初重先生をはじめとし考古学研究室の諸先生方にも御指導をいただいた。記して感謝の意を表したいと思います。

とを暗示しているようですらある。従来、この地の有茎尖頭器の典型と理解されてきた小瀬が沢洞穴遺跡のIV型が、おそらく非常に限定された空間内での型式変化の産物と把握され得ることも注意されるべきであろう。

柳又系の有茎尖頭器は、萩平遺跡を念頭に置く限り土器を伴う以前に

(1) 該当石器に関しかつて杉原莊介氏は「原語は、Tanged point あるいは Stemmed point である。これを有舌尖頭器というものがあるが、それは原語を Tanged point と考へての間違いだろう」(杉原 一九七四)と述べたことがある。一つの石器形態の認定とその呼称に関しては山積された幾多の問題があるが、こと本石器形態について茎(なかご)を舌状を呈すというかたちの特質にのみ集約させて「有舌尖頭器」という用語を用いるのはどうであろうか。茎の形状がはたして舌状であるかどうか自体も疑問である。むしろ尖頭器という器種内で茎を持ち併せた尖頭器形態の出現とその機能的特質といった史的意義をこそ重視すべきであろう。

こうした考えに基づき、以下本稿では「有舌尖頭器」という用語を統一的に用いることとする。それが単に訳語であつたとしたならばなおさらのこと、杉原氏の言われたように本用語の使用こそがより正統なものと考える。

(2) V型の有舌尖頭器は中本遺跡や服部台Ⅱ遺跡でⅠ・Ⅱ型やⅥ型に共伴するものと、立川遺跡・タチカルシユナイ遺跡などⅣ型に伴うものとは或いは区分されるべきかと考える。とりわけ後者に関しては所謂「遠軽ポイント」と型式的に把握される可能性もあろう。

(3) こうした有舌尖頭器群の型式変遷把握の爲の組成検討にあつては、各石器形態の型式性抽出とその属性が十分に把握されていない現在、器種及び形態レヴェルにならざるを得ないのであろう。今後、該当地方の石器群の型式学的研究は、単に通時的な意味ばかりでなく共時的な意味に於ける石器群理解の爲の最重要課題とならう。

(4) 例えば細石刃石器群の組成員として有舌尖頭器を把握して考えた場合、その直前に位置付けられる所謂「神子柴・長者久保」石器群の、まずもって時間的位置付けは一体どのようなものとなるのであろうか。両石器群の時間的前後関係は、本州地方での長者久保遺跡・後野遺跡と唐沢B遺跡・神子柴遺跡という時間差を持ち併せた「神子柴・長者久保」石器群のそれぞれに有舌尖頭器が見い出されないことから明らかである。長者久保遺跡・後野遺跡の石器群と酷似した組成と石器型式を有する北海道モサソル遺跡の存在は、少なくとも細石刃石器群と有舌尖頭器とが時間的に並行するものでないことを明示している。

(5) 立川遺跡第Ⅱ地点では搔器が、第Ⅲ地点では彫器がそれぞれ卓越して検出されている。こうした石器組成の片寄りは両地点間の時間的差異を表わしているというよりも、むしろ両地点での石器使用の頻度の、さらにそこに象徴されたところの生産活動の差異を表わしているものと考えらるべきであらう。

(6) おそらく両遺跡の有舌尖頭器はある程度の時間差を持つ数型式が混在しているものと考えられる。

(7) 例えば白石氏が有舌尖頭器群を大きく二大別され、複数型式の統合群として「小瀬が沢形」「柳又形」のそれぞれ有舌尖

頭器を位置付けられたことも同様な視点からであろう(白石 一九七六)。

- (8) 例えば先土器時代終末期のナイフ形石器群の理解にあつては、そこに複数型式のナイフ形石器を含みながらも代表型式である「茂呂型ナイフ」の存在をもって「茂呂系ナイフ形石器」群と呼称されている。それは複数のナイフ形石器型式が相互に剝片剝離技術・調整加工技術、そして素材及びその設定方法(用い方)等といった構成要素群を共有した関係にあるからである。これと同様な方法的視点をもって有茎尖頭器群を把握しておきたい。

- (9) 南原遺跡・花見山遺跡ばかりでなく中部北部地域で最古の隆起線文土器型式と目されよう新潟県田沢遺跡からもVI型と共III型の有茎尖頭器の出土が報じられている(芹沢・須藤 一九六八)。

- (10) IV型の有茎尖頭器の出土が確認されているこれら三遺跡からは、大塚氏の分類に拠るところの「一帯三条型」(大塚 一九八二)の隆起線文土器が発見されている。石器及び土器のそれぞれが同一型式を共有することは、各遺跡間の共時性を克明に物語っている。

- (11) こうした有茎尖頭器に見い出される身部及び基部形状の型式的差異は、また伴出する隆起線文土器のそれとも呼応関係にあるようである(大塚 一九八二)。

- (12) ここで注意されることは、同一の隆起線文土器型式を保有しながらも荷取洞穴や石小屋洞穴(永峯 一九六八)では石鏃を伴い橋立岩陰や前原・立石(宮下・吉沢 一九八二)では有茎尖頭器を伴う点である。或いは一つの地域差と把握することも可能であるし、また石鏃伝播の時間的差異と理解することもできよう。この問題と関連して興味を持たれることは、中部地方の爪形文土器と関東及び東北地方の最終末の隆起線文土器とが同一型式の有茎尖頭器を保有する事実である。両土器型式が時間的に並行する可能性もこうした資料からは指摘されるであろう(第10図参照)。いずれにせよ、こうした問題については稿を改めて検討するつもりである。

- (13) ただし、柳又遺跡と上黒岩遺跡とのこうした有茎尖頭器群の差異には、時間性のみならず空間性をも考慮する必要がある。上黒岩に顕著な有茎尖頭器が地域的な発達を遂げた可能性も否定できないからである。また上黒岩遺跡には比較的古相を示す隆起線文土器が伴出している事実も注意される。

- (14) こうしたあり方からは、有茎尖頭器と同様に石鏃もまた東日本により古く出現した可能性が指摘できるのである。

- (15) 有茎尖頭器以外の石器形態からもちろした時間的併行関係が説かれる。例えば半月形尖頭器は本州では尼子岩陰や小瀬ガ沢・壬遺跡など明らかに隆起線文土器しかも比較的新しい土器(微隆起線文)に共伴し、それ以前には見出し得ない非常に時間的限定性を持つ石器であるが、同じものが北海道の美利河I遺跡の有茎尖頭器群の組成員として見受けられるのである。北海道の有茎尖頭器は全てではないにせよ総体的により新しい編年の位置を有するものと考ええる。

# 引用参考文献

- 麻生 優 一九六八『岩下洞穴の発掘記録』
- 麻生 優・白石浩之 一九七六『泉福寺洞穴の第七次調査』(『考古学ジャーナル』第一三〇号)
- 麻生 優 一九七七『泉福寺洞穴の第七次調査』(『文化科学館だより』三十四)
- 安達厚三 一九六九『萩平遺跡A地点第二次発掘調査報告』
- 安達厚三 一九七五『萩平遺跡』(『日本の旧石器文化』1)
- 上田 薫・砂田佳弘 一九八四『藤沢市代官山遺跡の調査』(第8回「神奈川県遺跡調査・研究発表会」要旨)
- 大沢鷹之 一九六二『長野県野尻湖底杉久保遺跡新資料』(『オセド』3)
- 大塚達朗・小川静夫・田村 隆 一九八〇『市原市南原遺跡第二次調査抄報』(『伊知波良』4)
- 大塚達朗 一九八二『隆起線文土器瞥見』(『東京大学文学部考古学研究紀要』第一号)
- 大参義一 一九七〇『酒吞ジュリンナ遺跡(2)』(『名古屋大学文学部研究論集』史学17)
- 岡島 格 一九七七『町田市なすな原遺跡の調査』(『調査・研究発表会Ⅱ発表要旨』)
- 岡村道雄 一九八〇『Ⅶ：考察』(『鹿原遺跡』)
- 岡本健児・片岡鷹之 一九六九『高知県不動岩屋洞窟遺跡』(『考古学集刊』四卷三号)
- 加藤晋平・桑原 護 一九六九『中本遺跡』
- 加藤晋平・藤本 強 一九六九『一万年前のたんの』
- 加藤 稔 一九六五『東北地方の先土器時代』(『日本の考古学』I)
- 加藤 稔 一九六九『山形県史考古資料』
- 加藤 稔他 一九七八『弓張平遺跡』
- 神奈川県県民部県史編集室 一九七九『神奈川県史』
- 黒川東遺跡調査団編 一九七九『黒川東遺跡』
- 紅村 弘 一九七四『柊の湖遺跡』
- 国学院大学文学部考古学研究室 一九八二『壬遺跡』
- 慶応義塾大学民族学・考古学研究室 一九八三『壬遺跡』
- 慶応義塾大学民族学・考古学研究室 一九七六『沼ノ平遺跡出土石器群の研究』
- 小林達雄 一九六一『有舌尖頭器』(『歴史教育』九卷三号)



- 小林達雄 一九六三「長野県荷取洞窟出土の微隆起線文土器」(『石器時代』6)
- 小林達雄 一九六七「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」(『信濃』一九卷四号)
- 佐藤達夫 一九七一「縄紋式土器研究の課題」(『日本歴史』二七七)
- 小林 孚 一九六八「長野県上水内郡信濃町狐久保遺跡緊急発掘調査概報」(『信濃』20—4)
- 佐藤達夫・山内清男 一九六一「青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告」(『下北』)
- 白石浩之 一九七六「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について(下)」(『考古学ジャーナル』一二七号)
- 白滝村教育委員会 一九八二「白滝服部台Ⅱ遺跡・近藤台Ⅰ遺跡」
- 杉原莊介 一九七四「日本先土器時代の研究」講談社
- 杉原莊介・戸沢充則 一九七五「北海道白滝服部台における細石器文化」明治大学文学部研究報告考古学五
- 鈴木道之助 一九七二「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」(『考古学ジャーナル』76)
- 鈴木道之助 一九七八「石器の基礎知識Ⅲ」柏書房
- 鈴木重信・坂本 彰 一九七八「横浜花見山遺跡の調査」『第2回遺跡調査研究発表会要旨』
- 石器文化談話会 一九八一「座散乱木遺跡」
- 芹沢長介 一九六六「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」(『日本文化研究所研究報告』第2集)
- 芹沢長介・吉田 格・岡田淳子・金子浩昌 一九六七「埼玉県橋立岩陰遺跡」(『石器時代』8)
- 芹沢長介・須藤 隆 一九六八「新潟県田沢遺跡の発掘調査予報」(『考古学ジャーナル』27)
- 芹沢長介編 一九七四「古代史発掘」1
- 高橋 敦 一九八三「富士見市内における縄文時代草創期の石器群」(『研究紀要』3)
- 高橋 敦 一九八「斜行剝離をもつ有舌尖頭器について」(『人間・遺跡・遺物』——わが考古学論集1——麻生優編)
- 帝釈峽遺跡調査団 一九六四「帝釈峽遺跡群の調査Ⅰ」
- 鶴丸俊明 一九八二「北見市史」
- 名取武光・松下 旦「射的山」
- 永峯光一 一九六七「長野県石小屋洞穴」(『日本の洞穴遺跡』)
- 中村孝三郎 一九六〇「小瀬が沢洞窟」
- 中村孝三郎 一九七八「越後の石器」学生社
- 沼 弘・増田進治 一九六八「福井県鳴鹿遺跡の石器」(『考古福井』1)

- 畑宏 明 一九八四「湯の里4遺跡の台形石器」『考古学ジャーナル』233
- 早川正一・奥 義次 一九六五「三重県石神遺跡出土の石器群」『考古学雑誌』50—3
- 原川雄三・鈴木俊成 一九八一「多摩ニュータウンNo.426遺跡」
- 肥前町教育委員会 一九八二「田尾遺跡」
- 北海道埋文センター 一九八三「美利河I遺跡」
- 増田一裕 一九八一「有舌尖頭器の再検討」『旧石器考古学』22
- 宮下健司・吉沢 靖 一九八二「野辺山原における土器出現期遺跡の発見」『報告・野辺山シンポジウム一九八一』
- 松村和男 一九八三「石器」『前原遺跡』宮代町教育委員会
- 安岡路洋 一九七七「小岩井渡場遺跡」
- 山崎博信 一九六六「北海道における有舌尖頭器について」『北海道考古学』2
- 吉崎昌一 一九六〇「立川遺跡」
- 吉崎昌一 一九七三「タチカルシュナイ遺跡」
- 吉田 格・肥留間博 一九七〇「狭山・六道山・浅間谷遺跡」